

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	高橋 純一
2. 審査委員	主査：（岡山大学教授） 山田 秀和 副主査：（兵庫教育大学教授） 福田 喜彦 委員：（兵庫教育大学教授） 山内 敏男 委員：（鳴門教育大学教授） 伊藤 直之 委員：（岡山大学教授） 梶井 一暁
3. 論文題目	社会科授業力向上に寄与する教師集団の働きと影響に関する研究 ー富山市立堀川小学校における問題解決学習を实践する教師の成長を手がかりとしてー
4. 審査結果の要旨	<p>教科教育実践学専攻社会系教育連合講座 高橋 純一 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：令和8年2月15日（日） 10時10分～11時00分 場 所：オンライン（Zoom）</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>(1) 論文の構成</p> <p>序章 本研究の目的と方法 第1章 社会科の教員研修を通じた授業力向上に関する先行研究の分析 第2章 社会科授業力向上と教師集団の働きとの関係に関する分析枠組み 第3章 富山市立堀川小学校の社会科授業力と教師集団の働き（1） ー問題解決学習の原理に着目してー 第4章 富山市立堀川小学校の社会科授業力と教師集団の働き（2） ー問題解決学習の实践に着目してー 第5章 社会科授業力向上に寄与する教師集団の働きと影響 ー富山市立堀川小学校が示唆するものー 終章 本研究の成果と課題</p> <p>(2) 論文の概要</p> <p>本研究の目的は、社会科授業力向上に寄与する教師集団の働きとその影響を、問題解決学習の伝統的な実践校である富山市立堀川小学校（以下、堀川小学校）の教師の成長を手がかりにして解明することにある。</p> <p>序章では、社会科教育学における教師教育研究の重要性を確認した上で、本研究の特質と意義を示している。特に、子どもの内面を捉え、子ども一人ひとりの可能性を拓く教師の力量形成という、学術的かつ現代的な課題にこたえる研究の必要性を説明している。その上で、子ども理解を中核にした問題解決学習の伝統的な実践校である堀川小学校に着目する意義を論じている。</p> <p>第1章では、社会科の授業力向上に関する先行研究と、堀川小学校の授業研究に関する先行研究を批判的に検討し、本研究の独自性を導いている。学校文化やその歴史的経緯を視野に入れて教師集団の働きの全体像に迫るといふ、先行研究とは異なる本研究のスタンスを明確にしている。</p>

第2章では、子どもの学びを見取り、協議し合う社会科の研修を事例に、社会科授業力向上と教師集団の働きとの関係を分析するための枠組みを設定している。具体的には、著者らが実施した社会科教員研修による教師相互の学びに着目し、「子ども理解を深めていった場面」と「子どもを見取るための教師の力量形成に関わる場面」に関する協議内容を分析している。その上で、「①教師が所属する教師集団によるどのような働きかけによって、子どもの学びの良さやその新たな価値に気付けるようになるのか」、「②教師が所属する教師集団によるどのような働きかけによって、子どもを多様な視点で見取ることが可能になるのか」という次章以降の分析枠組みを導いている。

第3章では、問題解決学習の原理に着目して、堀川小学校における社会科授業力向上と教師集団の働きとの相互関係を解明している。最初に、戦後初期社会科期における問題解決学習の基本原則を明確にした上で、当時の堀川小学校における教師の社会科授業力を抽出している。特に、子どもの思考の転換・変容の機会を捉えて単元を構想する力や、授業場面での資料選定・活用力、助言力を具体的に示している。さらに、そうした社会科授業力向上を支える教師集団の動きを考察し、子どもの内面や思考を捉える研究が共同的に深められていったことを論じている。

第4章では、問題解決学習の実践に着目して、堀川小学校における社会科授業力向上と教師集団の働きとの相互関係を解明している。ここでは、現代の問題解決学習に焦点を当て、問題発見の過程に特色ある実践を行ったX教諭と、問題解決の過程に特色ある実践を行ったY教諭に着目している。授業記録や授業資料、聞き取りの内容を分析・統合することで、単元構想段階の授業力、問題発見場面の授業力、問題解決場面の授業力をそれぞれ整理し、「子どもの解釈を基盤とした社会科授業力」を一層明確にしている。さらに、赴任時から研究主任の役割を担うまでに至るY教諭のライフヒストリーや、Y教諭が発行してきた研修日より、同僚教師を含めた聞き取りの分析を通して、社会科授業力向上を支える教師集団の働きとその影響を明らかにしている。特に、「同僚教師からの解釈に対する問いかけ」と「解釈力を高める自由闊達な対話」、そしてその背景にある「子どもを理解する高い力量（鑑識眼）を備えた研究主任の存在」という要素を見出している。さらに、その根底には、「きびしい仲良し（同僚性）を基盤とした組織風土」が根付いていることを論じている。

第5章では、社会科授業力向上に寄与する教師集団の働きと影響を総括し、堀川小学校の分析から導かれる示唆を述べている。子どもの内面世界に迫る教師の姿や、子どもの解釈研究を中核に据えた校内研修、そして校内研究組織の創出や後進の育成を担う研究主任の役割の三点に焦点を当てた示唆を論じている。

終章では、本研究の成果と課題を明確にしている。成果として、問題解決学習を実践できる教師の社会科授業力を構造化したこと、それを支える教師集団の特質を明確にしたこと、教師集団をリードする研究主任の役割を明確にしたことを整理している。今後の課題として、管理職を含めた教師集団の働きを明確にすること、問題解決学習の伝統校以外での社会科授業力向上について明らかにすること、若手教師の授業力向上に資する方策を解明することを示している。

2. 審査経過

本論文は、「社会科授業力は、どのような教師集団の働きによって向上するのだろうか」という問いを、堀川小学校に手がかりを求めて実証的に究明した成果をまとめたものである。研究目的と論文構成は整合しており、以下の点において意義が認められた。

(1) 論文の独創性について

本論文は、社会科授業力向上に寄与する教師集団の働きと影響を、問題解決学習の伝統校である堀川小学校を事例にして解明しているところに独創性が認められる。論究の過程において本論文は、問題解決学習の原点となる初期社会科期の堀川小学校の取り組みを考察した上で、現代の実践から抽出される社会科授業力の要素や、その向上を促す教師集団の働きを、学校文化やその歴史的経緯を踏まえて総合的に明らかにしている。本論文は、これまでの研究で主に焦点が当てられてきた教員研修や校内研修のみならず、教師集団の働きの全体像に迫る分析を行っている点に独自性があると評価された。

(2) 論文の発展性について

本論文は、社会科教育学における教師教育研究に、問題解決学習の実践に資する新たな知見を提供するものであり、発展性が認められる。とりわけ、本論文は、子ども理解を基盤にして問題解決学習を構想・実践するための社会科授業力を構造化し、その向上を支える教師集団の働きを可視化しているところに意義を有している。本論文の成果が今後の社会科教師の養成や研修のモデルとして応用されるとともに、教師の成長を支える同僚性の構築に向けた社会科教師教育研究が一層進展することが期待される。

(3) 学校教育の実践への貢献について

本論文は、子ども理解に基づく社会科授業の実現という永続的な主題を深化させただけでなく、個別最適な学びと協働的な学びの実現が求められる今日の教育動向に対しても示唆を与えるものであり、学校教育の実践への貢献可能性が認められる。本論文は、子どもを主体とした学びを促すための具体的な方法論を、授業実践のレベルから校内研究組織づくりのレベルまでを視野に入れて提示しており、学校教育実践の質的向上の方向性を示すものとして評価された。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 高橋 純一 の提出した学位論文が博士(学校教育学)の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。